

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(3)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

The Guardian
Tue 25 Feb 2020
Erica Jeal

闊達なシューマンと駆動する武満

ロイヤル・フェスティヴァル・ホール、ロンドン パーヴォ・ヤルヴィが落ち着きのないラフマニノフで東京のNHK交響楽団を率いた。一方、ソル・ガベッタは輝かしかった

パーヴォ・ヤルヴィが東京のNHK交響楽団と共演して初めてのヨーロッパ・ツアーを行ったのは、3年前に遡る。その際は、繊細に奏でられた武満と力動感あるエキサイティングなマーラーを聴かせてくれた。今回、ラフマニノフの《交響曲 第2番》の演奏は力動感こそあれ、他の要素はほとんど感じ取ることができなかった。

今回もまず演奏されたのは武満作品だった。エミリー・ディキンソンに靈感を受けた作品《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》は、ゆらめくような繰り返しのなかで、ときに心地よく、ときに不安げに響く。おそらく、シューマンの《チェロ協奏曲》のために、力を室内オーケストラのレベルまで抑制していたのかもしれない。ソル・ガベッタの独奏は慎重で思慮深く始まり、虚勢を張ることのない、活発な知性を持っていた。だが、ヤルヴィが抑制していたにもかかわらず、バランスは管弦楽の方に大きく傾いてしまっていた。ガベッタが魅惑的なアンコール、ペテリス・ヴァスクスの《チェロのための本》より〈ドルチッシモ〉を演奏し—さらに歌った—ときは、彼女は何とも競い合う必要はなかった。

ラフマニノフの第1楽章の演奏は、この音楽がどうやったら行き詰まらずに済むかを教えてくれた。あるパッセージは旋律によって牽引され、またあるパッセージは和声の進行によってのみ展開される。ヤルヴィとNHK交響楽団が、感情に沈溺する交響曲の一つを前進させようとしていた意欲には満足できる。しかしながら、その根底にあるリズムの力動に対する固執は、ほとんど機械的なもののように感じられた。音楽は間違いなく目的地へと運ばれていくのだが、どこに葛藤があったのだろうか？ 結尾にたどり着いたとき、この巨大な作品が

要求する開放感はもたらされなかった。しかし、アンコールはまさしく祝祭だった。エストニア出身のヤルヴィが語ったように、その日は彼の祖国の独立記念日だったのだ。会場にエストニア人がほとんどいなかったとしても、弦楽器によるヘイノ・エラーの祖国の旋律は、魂がこもっているように感じられた。